

劇団ふあんハウス 「団長の独り言」

三月八日（日）「立ち稽古」

昨日から、立ち稽古を行った。
お芝居の稽古というのは、大きく分けて「読み合わせ」と「立ち稽古」に分かれる。

「読み合わせ」というのは、全員が座ったまま、役の人物のイメージを膨らませ演じる稽古の事で、「立ち稽古」というのは、稽古場という空間を本番のステージに見立てて、動き回りながら行う稽古の事をいう。

本当はねえ・・・あと二、三回は読み合わせをして、私の演出的なイメージを役者の皆さんに伝えてから立ち稽古に入りたいところではあるのだが、なにせ週に二回しか稽古を行わない劇団ふあんハウス、今回は時間がない。そこで、早々に実践的な立ち稽古を行うことにしたのだ。

稽古を開始する前、まずは出来立てのホヤホヤの製本された台本授与式から。
アマティーがピアノで演奏する「表彰状のテーマ」（というのか

な？）が厳かに流れる中、私は一人、一人の名前を呼び、演出席まで来たメンバーにお辞儀をして、「がんばりましょう！」「よろしくおねがいます。」等の声を掛け、台本を手渡す。

「卒業証書授与式」をイメージしていただけばいいのだが、こんな大袈裟な事をしている演劇団体は、星の数ほどある日本の劇団の中でも、おそらく劇団ふあんハウスだけかもしれない。

では、何故こんな事を続けているのか？といえ、台本は役者にとって命！「台本を粗末に扱うやつはろくな役者じゃない！」という、今時流行らない「精神論」に私がこだわっているのと、「みんなが無事ゴールできますように！」「最高のお芝居になりますように！」という願いを込めて、一人、一人の目を見て、大事な台本を手渡す行事を継続している。

「馬鹿らしい」ことなのかもしれないが、でもね、劇団ふあんハウスはそういうこともこだわり続けて十七年目の劇団なのだから、初めて参加する皆さんにも、協力していただいているのだよ。

そんな「授与式」を終えると気持ち

ちを切り替え、始めにホワイトボードに、私がイメージする大まかな舞台図面を描き、皆さんが芝居を行うフィールドが、どのようなものなのかを把握してもらい、大まかな動きを決めていく立ち稽古を、プロローグから順を追って行っていく。

初めのうちは、「上手から出てきてそこに座ります」「ここで丸くなってください」「雀はここに立つ」等、動きをつけていったのだが、どうしたものだろうか？「座る」と言われれば、なーにも考えず、なーんの工夫もしないでただ座っているだけ、「ここから出てくる」と言っても同じ、その上「全員が集まるシーンでは、まるで鳥合の衆・・・」それにセリフを語ってもらうと、無意味にただ吠えているだけ。いい加減、センスのない役者達を見ていて、段々ライラしてくる。

素人の皆さんに、初めて「お芝居」というものを「教えている」わけじゃないんだから。

今、目の前で「芝居ごっこ」をしている役者達は、つい先日、大盛況の中、何百人ものお客様に大きな感動と元氣と笑顔をお届けした役者達なのに、演目が変わり新たな芝居の稽古を始めたなら、なん

だよ・・・このさまは。

イライラを通り越して、情けなくなり、完全にやる気のなくなった私は、もう動きをつべこべ言うのもバカらしくなり、「お好きにどうぞ」とばかりに、台本を放り投げ、みんなの「お芝居ごっこ」に口出しをせず、呆れ顔で静観した。

はーあ・・・いくら最初の立ち稽古とはいえども、何故にもっと積極的に動かないのかな？「私はこう演じたい！」「こんなキャラクタでやってみたい！」「ここはこういう動きでいきたい！」という工夫はないのだろうか？

どうして、何も用意してこないのかな？箸の上げ下ろしまで指示されなきゃ、どーすることもできないというほど、キャリアがないわけじゃないだろうにねえ。

しかし、ここで投げ出すわけにはいかない・・・こんな状態でも、五月までに、劇団ふあんハウスらしい芝居を完成させねばならないからね。

「最初はこんなもの、いつものことだ・・・」と己に言い聞かせ、皆さんには今一度プロフェッショナル魂を自覚してもらいつつ、今日のところは、手取り足通りの稽古を淡々と行ったのでした。